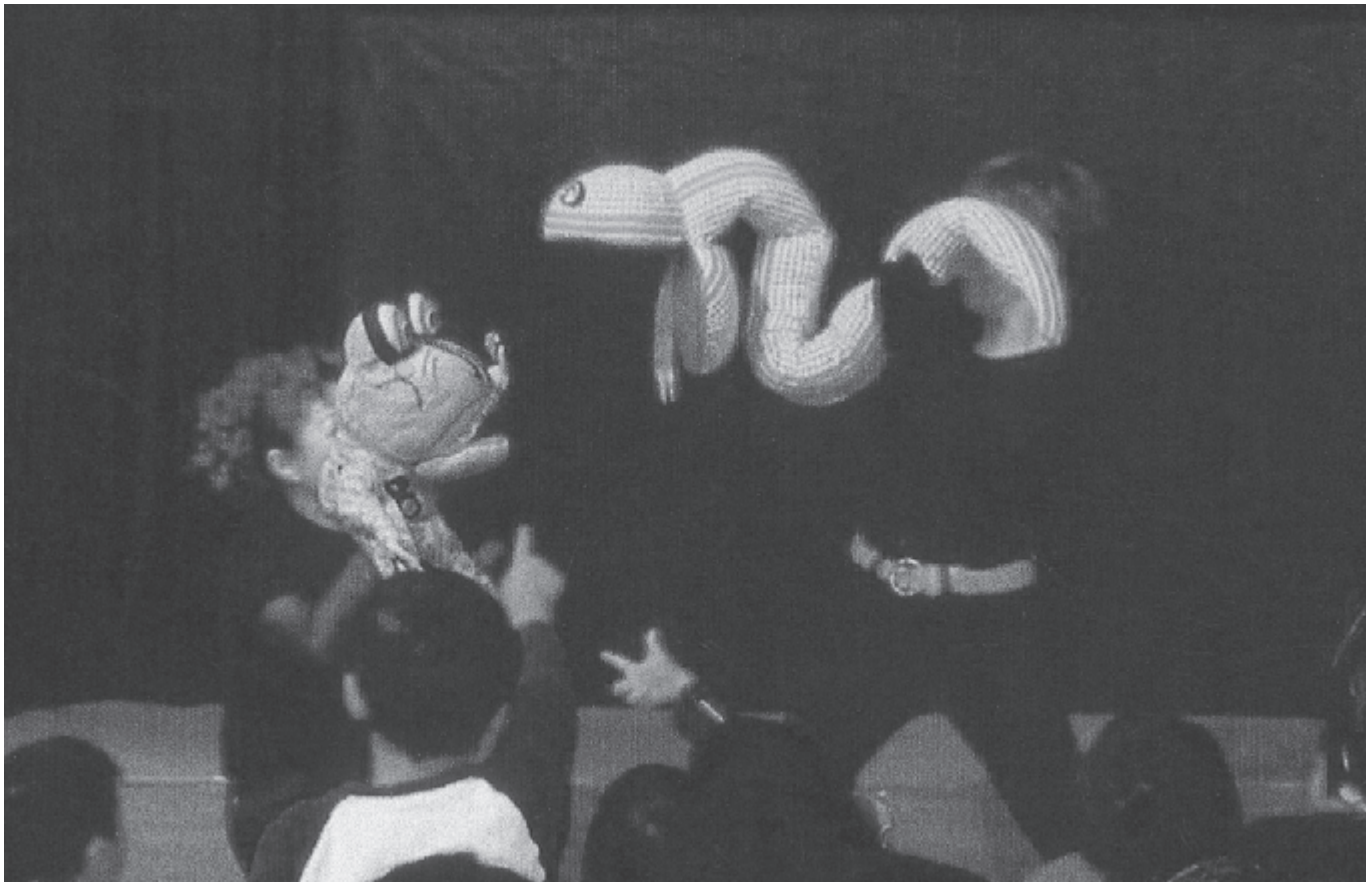


人形劇「かえるとへび」上演風景（2003年11月　キッズプラザ大阪にて）

魅せます! 観客参加型の熱い人形劇

女性2人の「人形劇団C・F（シーエフ）」

年間160万人を超える利用者で賑わう大阪市天王寺動物園。今年1月2日午後、園内のレクチュアルームで、2004年の新春行事が行われていた。ミニコンサートに続いて園長の年頭あいさつがあり、その後の腹話術に続くフィナーレのイベントとして登場したのが、人形劇団C・F（以降シーエフ）の人形劇だった。

演目は、ウサギをつかまえて食べようと追いかけるキツネと、知恵を働かせてキツネを撃退するウサギ母子が登場する「しっぽ」。地面に見立てた黒幕の中央に、大きな木がそびえる舞台。その左手からウサギの母子が登場する。

だが始まってすぐ、一般の人形劇と様子が違うことに気づく。始まる前に「静かに見ましょう」と注意されるのが普通だ。だがシーエフが演じるのは、「静かに見なさい！なんて言わないで」という人形劇なのだ。

一部を再現してみよう。子ウサギのウサちゃんが「おかあさん、まだ逃げるの。ぼく限界。もう歩けないよ」。むずかるウサちゃんに母ウサギが「いいこと考えたわ。穴を掘ってお家をつくるの。ウサちゃんも、そっちを掘りなさい」。ウサちゃん「ここを掘るんだね。でも固そうだな」と言いながら、客席の子どもたちに話しかける。「ねえみんな、どうしたら力が出る？」

それまでに、ウサギの母子と何回かやりとりをしていた子どもたちが、大きな声で応援を始めた。「頑張れ！」「頑張れ！」―。

また、穴が完成したあとのシーンでは、母ウサギが「みなさん、この穴のことは、キツネが来ても内緒にしておいてくださいね」と頼むと、

プロフィール　武内 千恵美（たけうちちえみ）さん
岩本 富美子（いわもとふみこ）さん

〔武内千恵美さん〕大阪市生まれ。小さいころから裁縫や人形作りが得意な子どもとして育つ。結婚後、子どもの通う幼稚園で、園児のための人形劇用に、布製の本格的な人形を製作するようになったのが人形劇との出合い。その後は人形製作だけでなく、講座などで人形劇の演じ方や脚本のほか腹話術も学び、95年岩本さんと人形劇団C・F（シーエフ）を形成。

〔岩本富美子さん〕愛媛県大洲（おおず）市生まれ。高校、短大と演劇部に所属し、幼稚園の教諭として勤務しながら人形劇サークルでも活動。79年に結婚して大阪へ。92年から、紙しばい講座の講師だった口演童話の山野昭典さん（故人）の門下生として修行。C・F結成後は武内さんと共に公共施設や幼稚園、保育所、小学校をはじめ老人会や区民まつりなどに出演しているほか、演劇指導やイベントの司会などでも活躍中。

「ハーイ」と一斉に元気な返事。このあとキツネが現れて「ウサギどこへ行った？」と尋ねても、こどもたちは「知らん」。「ずっと見とったんやろ、知ってるやろ」と突っ込まれても「知らん」「あっちや」の大合唱。「上や」という声にキツネが「上？、ウサギが空飛ぶか」とやり返すと爆笑が起こるなど、いつの間にか子どもたちが人形劇の世界に没入しているのである。

観客参加型のこのユニークな人形劇を演じているのが、武内千恵美さんと岩本富美子さん。劇団名は、2人のローマ字書きの名前の頭文字を結合させたものである。

幼稚園で人形づくり 司会のために腹話術も

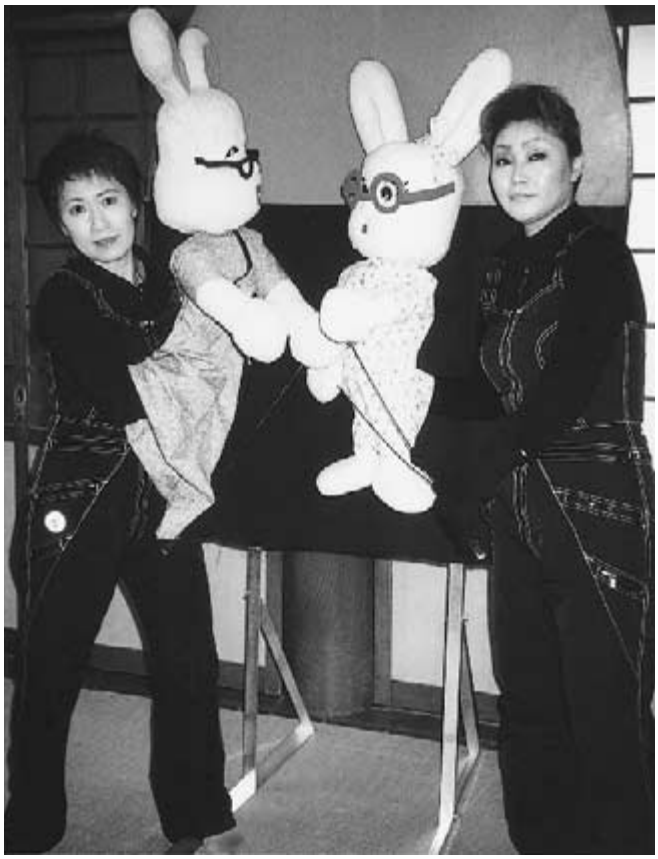
武内さんは大阪市生まれ。岩本さんは愛媛県大洲市の生まれだ。「小学校のころから針仕事や人形作りが好きで、将来はデザイナーになりたかった」という武内さんと、「母親から昔話や紙芝居を教わり、視聴覚分野に力を入れていた父が、8mmや16mmカメラでの撮影や編集をするのを見ながら育った」と言う岩本さん。

武内さんと人形劇との出合いは、幼稚園のPTA会長をしていた90年ごろだった。「それまで紙製の人形を使っていたので、洋裁を生かして布製の立体的な人形を製作した」のが始まり。最初は人形作り担当の裏方のつもりだったのだが…。「メンバー不足で、実際には子どもの前に立って演じなければならなくなり」、大阪市こども文化センターの人形劇講座を受講。これが縁で、同センター所属の人形劇グループ「トマト」のメンバーとなり、修行を積むことになる。

次に学んだのは、「司会をする時に役立つように」と選んだ腹話術で、北区の市民教養ルームの腹話術講座に通っている。

人形劇は高校時代から 口演童話者に入門

一方岩本さんは、高校2年生の時に演劇部で人形劇を演じた経験の持ち主。短大卒業後は地元の幼稚園の教諭をしながら「人形劇のサークルで活動していた」というから、人形劇のキャリアは半端ではない。結婚して大阪住まいとなるが、子どもが小さいうちは語りの講座に通い、修了後は地元の図書館で子どもたちに語ったり地域の文庫活動にも参加している。



最新作「うさちゃんのおつかい」の人形と一緒に（2004年1月）

その後、さらにレパートリーを広げるため、こども文化センターの紙芝居講座にも通った。講師は、毎日放送「お話どんぶらこ」の監修・出演をしていた、口演童話の故山野昭典さんだった。

紙芝居講座を修了した岩本さんは、山野さんに認められて門下生に。山野さんが担当していた幼稚園や小学校での口演童話、保母研修会や講座に同行し出演する中で、お話の語り方や紙芝居の演じ方、人形劇などのアドリブの生かし方、間の取り方などの実技を教わり、身につけるのである。

そんな岩本さんが武内さんと出会うのは、山野さんの講座の会場だった谷町の大念寺を、武内さんが訪れたことから。大念寺で岩本さんを紹介された武内さんはその後、岩本さんの使う人形を製作するばかりか舞台を手伝うようになり、やがて2人は山野さんの勧めで”独立“とも言えるシーエフ結成の日を迎えるのである。

ところで、自分たちの演じる人形劇を武内さんは、「筋はあるが、脚本はないんです。子どもたちの反応によってセリフを自分たちで考えて、アドリブでやる人形劇なのです」といい、岩本さんは「言葉のキャッチボールができる人形劇」と表現する。

2人の人形劇が注目を集めていることは、活躍の場が天王寺動植物公園やキッズプラザ大阪、OCATなどのほか、幼稚園、保育所など幅広く、人形劇やイベント司会のほか子ども演劇の指導や保母研修会の講師などもこなしていることで分かる。

興味のある方のために、近く開催される出演イベントをあげておこう。主なものでは「心の平和フェスタ in 四天王寺」（2月27日～29日、四天王寺本坊）や「人形劇シーエフ公演あつくなろう！人形劇」（3月7日、クレオ大阪中央）、「春の動物と花のフェスティバル」（日程未定、天王寺動植物公園）などがある。

実は、2人とも職場は違うが、事務員としての職業を持つ。それだけに、春や秋のイベントシーズンは超多忙だが、「帰るときに『おもしろかったなあ』という子どもたちの声を聞く。それがうれしくて」（岩本さん）、「今や、子どもの笑顔を見るのが快感になっています（笑）」と武内さん。楽しげに話す2人の笑顔に、子どもたちの声がかぶさってくるのだ。「おもしろかったで」「よかったで」ー。

（文・脇本勤／表紙写真・高島悠介）

Vivo la Vita 表紙イラストレーターよこやまゆみの「でっかい絵をつくろう」の前で撮影。